

令和7年度マイスター・ハイスクール事業 成果発表会 講評シート

学校名(学校法人一川学園清和学園高等学校)

1. 取組についての評価

・地域を理解するために、越生町について「学び」、越生町の「課題」を見つけ、学びを活かして「解決策」を考え、考えた解決策を越生町の「課題解決」を実践し貢献するという、「学び・体験」→「計画立案」→「実行」→を繰り返しPDCAを回しながら成果の実証・改善を行うというフレームワークが具体的なケースを取り入れたカリキュラムとして組み込まれている点は評価できる。

養成を目指す人材像も明確で、越生町とサステナビリティを理解しながら、デジタルリテラシー、コンセプチュアルスキル、アントレプレナーシップを学び、越生町と産業界の持続的成長を担う人材育成モデルを様々なプロジェクトで実践できている。カリキュラムに経営視点で校内ランチ販売を題材にして資金繰りの学びまで取り入れている点は評価できる。

通信制高校でありながら、これまで行われていなかった文化祭を生徒の署名活動によって実施した点などは、生徒が自分ごととして主体的に取り組んでいることの表れである。

通信制高校のモデルとなるような十分な成果が得られているのではないかと評価する。

・同校が所在する越生町を筆頭に地元自動車メーカーや銀行、自動車学校など幅広い連携先と関係を構築し、数多くのプロジェクトを展開している。

・1年～3年次までの学びを段階的に配置し、無理なく発展できるカリキュラムを構成していることに加えて、民間企業からCEO派遣を受け、企業運営の視点によるカリキュラムを実装・展開している。

・幅広い連携先との関係を存分に活かし、顧客サービス向上や顧客の声を活かした新商品開発(改善)、プロジェクト資金の借入、運転資金の算出など、実社会での取組を実践できるカリキュラムを展開している。

・私立・通信制高校で比較的少ない教職員体制下で本事業を実施されており、少人数体制でも行政や産業界と取り組めるポイントなどが整理され、他校での取組の参考となることに期待。

2. 今後の課題と考えられること

・事業コンセプトやカリキュラム、実践型PBL、運営などに関してCEOが担ってきた役割が大きく、MHS事業の終了に伴いCEOが退任した後も仕組みとして継続できる体制づくりが必須である。

・地域(越生町)にコミットした地域人材の育成という観点からは、自走に向けた「越生町コンソーシアム」を構想している。これまでの越生町との緊密な連携体制をさらに発展させ、地域に貢献できる自立・自走に向けての継続的な取組を期待。